
アンティーク・ドール

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンティーク・ドール

【Nコード】

N4606D

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

ある骨董店に人形のような少女が尋ねてきました（この話は小説の同盟のお題「クリスマス」にて文字数制限がある上で書いた小説ですので短いお話となっています）

宝石のショウケースを覗き込んでいる少女がいた。

クリスマスプレゼントを買いに来た男女が嬉しそうにじゃれ合いながらにぎわう街の中で、その少女だけが異質だった。

アンティークを扱う店内に入ると、異質な彼女はまるで店内の商品にでもなってしまったように奇妙な一体感を見せた。

彼女はサファイアの指輪を見つめている。

頑なに表情を動かそうとしない。

まるで「アンティーク・ドール」のようだと思った。

黒い、ドレスのようなコート。

襟元にわずかに光る銀のロザリオ。

金色の髪。

そして、

灰の瞳。

「お気に召しましたでしょうか」

私は少女に慇懃に声をかけた。

この業界に勤めてもう三十年近くなるだろうか。何年も買う人間を見ていると、その人物が真に目の肥えた人間か否かが分かってくる。

少女は、まだ若くはあったが、私が見た中でも抜きん出て目の肥えた人間だと分かった。

「これ……」

少女がドールのような瞳で私を見る。

見開かれたまま、表情は浮かんでいない。

「とても珍しいものね」

まだ使い慣れない風の日本語だった。

イントネーションが間違っている風ではない。あまり抑揚がないせいで日本語が不自由な外国人に見える。

だが、彼女の国籍までは分からなかった。

私は日本語で続けた。

「おわかりになりますか？」

「オー・リリー」

少女の口から出た言葉に私は驚く。

あまり知られない細工師の名前だ。

「ご存じなので？」

「爪がないのに宝石がきちんと台座にはまるの。人の捨てるような形の悪い石をわざと使うのに、仕上がりはいつでもキレイ。不思議な細工師よ」

私は微笑んだ。

やはり、少女は装飾品の価値の分かる人間だ。他のものが黙って通り過ぎるものを少女は見落としていなかったのだ。

「値札がないのは、売り物ではないから？」

「かの細工師の作品は日本国内ではあまり出回りません。ですから、値が付けられないのですよ。それに見合った価値をお客様が付けて下さればお譲りすることもできますが」

けれど、売る気にはなれない。

言外にそうにおわすと、ふうん、と少女が初めてわずかに表情を変えた。わずかに目を細めて、口元をゆるめて、笑っているかのよう

に首を傾げる。

「残念ね、私には、買えそうにないわ」

「左様でございますか」

「でも、また見に来てもいい？」

私は頷く。

「いつでも。私は店長の渡辺と申します。失礼ですが、お名前を伺

つてもよろしいでしょうか？」

灰色の瞳が答える。

「ユリ」

リリーの作品を見に来たユリという少女。

偽名にしても本名にしても随分と洒落の利いた名前だ。

次の日、彼女は閉店間際になってから私のアンティークショップを訪れた。まるで、他に邪魔されたくない、とでも言うかのように。流行があるとはいえ、もともとそれほど客の出入りする店ではない。閉店間際になれば人が来ることはほとんど無かった。

普段ならば閉店10分も前になれば閉店の準備をしていたのだが、今日はその気になれなかった。少女が来るだろうという予感があったからだ。

「おじ……ええっと、渡辺さん、こんばんは」

少女は無表情のまま店内に入ってきた。

「こんばんは、ユリさん」

彼女は店内をぐるりと見渡した。

並ぶ商品達は私が日本や海外であつめた骨董品ばかりだ。最近は少しブームが起ったので若い客もちらほらと見えるようになったが、彼女ほど若い客はまだ珍しい。

しかも、彼女は目利きの客だ。

ここまで珍しい客は滅多にいない。

「昨日は気付かなかったけど」

少女は飾り時計を見て言う。

「ここにあるものは本当に珍しいものばかり。盗難に遭えば二度と日の目をみないでしょうね」

私は曖昧に笑う。

少女は無表情に続けた。

「けれど、あの時計だけは偽物。良くできているけれど」

私は感心して少女を見た。

あの時計を偽物だと見破った客は少女で二人目だ。しかも彼女は遠くから眺めるだけで偽物だと判断した。

そもそも鑑定はデザインを見て、素材を見て、印字されている文字を見て判断する。鑑定書があればそれも確かめて調べる。著名な美術品には誰の手に渡ったのかを記す履歴書のようなものまで添付される。

壁に掛かっている状態で遠くから眺めただけでは、あそこまで精巧に作られたレプリカを鑑定するのはまず不可能と言っても良い。

「どうしておわかりになったのですか？」

「音が違うの」

「音？」

「時計の、音。秒針が古い音を刻まない。古いものを利用して作ったのでしょうか？ でも秒針だけは新しいもの。……私には、分かるの」

少女は振り向いた。

偽物を展示していたことを責めるわけでも、自分の鑑定眼をおごるわけでもない。ただ真っ直ぐと私を見つめる。

私はくすりと笑った。

「紅茶でも、お飲みになりませんか？」

言うとき少女は少し不思議そうにした。

無表情に見えるが、一言一言発する事に彼女の表情は変化している。

中学生くらいだろうか。落ち着いた雰囲気はもう少し上にも見える。どちらにしても若い女の子の割に表情は少ない。だが、だからといって無感情な訳でも、無表情なわけでもないのだ。

「もう閉店になります。ご迷惑でなければこの年寄りの話し相手になって頂けませんか？」

そう頼み込むと少女は瞬いて頷いた。

「紅茶、いただきます」

コートを脱いで少女は椅子に腰掛ける。

少女の脱いだ黒いコートを預かりハンガーに掛けると、私は紅茶を淹れた。

普段、常連客をもてなすために紅茶や珈琲を用意して待っている。閉店後に一人で楽しむこともある。私は振る舞える中でも一番いい紅茶を選び、少し暖めたミルクと共に少女の前に差し出した。

少女は黒い衣服を着ていた。

コートを脱いだ後も変わらず真っ黒な服。胸元で光る銀のロザリオだけが光を放ち目立っている。

「お住まいは日本なのですか？」

「住んでいるのはイギリス」

「では、こちらには観光で？」

「……見に来たの」

「見に来た？」

少女はちらりと指輪の方を見る。

私はその視線の先よりも、少女の瞳を見ていた。

灰色をしたドールのような少女の瞳は、何とも言い難い表情を浮かべオー・リリーの作品を見つめている。

「ここにあると人伝に聞いたから。日本に来たついでに、ここに来たかったの」

「思い入れがあるのですか？」

少女は頷く。

「あれは、私を作った人の作品だから」

言ってから、少女は口を噤んだ。

話すつもりはなかったのだろう。骨董品店の独特な雰囲気流されてつい言ってしまったと言うような感じだ。

私は少女と向かい合うように座った。

「……私の知っているオーは細工師ではなく、ただの寂しがりのおじいさんだった」

少女は独り言のように言った。

私の視線と交わると、彼女は少し目を伏せる。

「やっていることは古い人形を集めて、同じ人形に造り替える作業だけ」

「同じ人形に？」

「そう、実在の女の人をモデルにしてずっと作っていたわ。私も、その作品の一つ」

意味が理解しきれずに私は瞬いた。

今日はクリスマススイブだ。神話のように魂を込められた人形が尋ねて来るという奇跡があってもかまわないと思った。

しかし、

「私にはあなたが人形には見えませんよ」

「それは、未完成だから。オーは私を完成させる前に亡くなったから」

「……完成、させて欲しかったですか？」

少女は、瞬いた。

「え？」

私は立ち上がり、ショーケースに近付いた。

ガラスケースの鍵を開けて、中の指輪を取り出す。曇りを知らない青い宝石が自ら光を放つように輝いた。

「リリーは、もっと時間があつたとしても、あなたを、完成、させることはありませんでしたよ」

「どうして？」

「もったいないからです」

私は微笑んで時計を見上げた。

少女の視線が私の視線の先を追う。

「あれは、私の作品なんですよ」

「渡辺さんの？」

「はい。あと少しで本物と寸分違わぬものが出来たはずです。材料もありました。だけど、私は完成させるのがもったいなくなってしまうんです」

じっ、と灰色の瞳がこちらを見つめた。

私はその目に微笑みかけた。

「世の中には本物と鑑定されるレプリカは沢山あります。完成していたらあれもその道を歩んでいたでしょう。けれど、私は手元に置いておきたかったんですよ」

「どうして？」

「本物だからです」

世間にとってはただのレプリカであるけれど、自分にとっては本物の自分の作品だった。手から離れるのが嫌だった。だから敢えて本物とは違うように作った。

私はテーブルの上に指輪を置いた。

「宝石や美術品は持ち主を選びます。これの持ち主がいるとしたらユリさんでしょう。もしも、あなたの指にぴったりとはまったらあなたに差し上げます」

「はまらなかったら？」

「私がお預かりしておきます。あなたの指に合うようになるまで」
彼女は何かを試すかのように指輪を手にとった。

わずかに震える細い白磁のような指にリングがするりと降りる。

私はその様子を見守った。

「……ゆるいわ」

ぽたり、と何かが落ちてティーカップに波紋を描く。

少女は自分の手のひらを抱きしめる。

「こんなじゃ、すぐに落ちちゃう」

泣き笑い顔が私の方に向けられた。

今まで見てきた中でも一番少女らしい表情だった。産まれて初めて自然にあふれ出したかのような彼女の感情に私は安堵する。

クリスマスに、おとぎ話のような奇跡なんて必要ない。

私は、彼女の笑顔に出会えたことに、感謝した。

※ ※ ※

ひいじいちゃんがその少女と出会って今年のクリスマスで半世紀が過ぎる。どう考えてもその女の子はもうしわくちやのバーちゃんになっているだろう。

結局彼女は指輪を取りに来ることはなかった。

今も店内に並んでなかなか来ない持ち主を待っている。

じいちゃんも親父も、ひいじいちゃんの遺言を守ってこの指輪を売らずに守り続けた。俺もまた同じように指輪を売らずに置いてある。

時々、本当にあったことなのか疑問に思うが、こういう話の好きなコレクターには結構うけがいい。おかげで店は指輪に守られているかのように潰れず栄えず続いている。

俺は美術品に消極的な親父から引き継いで、長く続くアンティークショップの店長になった。店長と言ったって従業員がみんな身内だから、形だけのものだ。

壊れかけの暖房を直しながら人の入ってきた気配がして俺は声をかけた。

「いらっしやいませー」

脚立の上から振り向きもせずと言うと、その人の気配は迷いもせず店内に入ってきた。エアコンの調整をして動き始めたのを確認

すると、俺はすぐに客の所へ向かう。

若い女の子だった。

茶髪で今時風の格好をした女の子。彼女は熱心な様子であの指輪を見つめていた。

「あ、それ、売り物じゃないんですよ」

俺は彼女の後ろに立って声をかける。

「知っているわ」

僅か笑いを含んだような声で少女が言う。

俺は首を傾げた。

少女が振り向く。

強い印象に残る灰色の瞳。胸元には銀のロザリオが揺れる。

俺はわずかに目を見開いた。

俺と彼女との指輪の話はここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4606d/>

アンティーク・ドール

2010年10月8日15時28分発行